

松蔭 校長室だより

2019年 12月 5日 発行

—校長から保護者の皆さまへのメッセージです—

松蔭中学校・高等学校
校長 浅井直光

喜ぶ人とともに喜び、泣く人とともに泣きなさい。(ローマの信徒への手紙 12:15)

2学期の活動あれこれ

English Roomの新しいスタッフとして、タンザニア出身のKarani John Paul先生が水曜日と木曜日の放課後に在室しています。神戸大学大学院博士課程で金融経済学を研究する物静かな31才の彼はクリスチャンで、JP(ジェイピー)先生と呼んでほしいとのこと。本校では初めてのアフリカ大陸出身のスタッフです。他の曜日にはシャロン先生、ベイ先生がおられます。気軽に利用していただきたいと思います。

校長室でランチタイムに懇談する「リーダー面談」では今学期、各クラブの部長と話しました。1学期のクラス委員長や生徒会役員も含めて69名の「各組織のリーダー」たちが来室してくれました。同級生や下級生をまとめあげ、リーダーシップを発揮することはしばしば困難を伴います。ある生徒は「下級生の頃とは違う見方ができるようになった。視野が広がり自分も変わった」と話してくれました。リーダーシップ研修の機会として4年前から始めましたが、いつも最後に「松蔭をもっと良い学校にするにはどうしたら良いと思いますか?」と尋ねることにしています。生徒たちは戸惑いながらも真剣に考えて答えてくれます。毎年楽しみにしている時間です。

中間考査終了後すぐの修学旅行では、中3が長崎など北九州方面、高2は東北方面を訪問しました。東北方面は台風被害のために一部移動ルートを変更するなどの影響を受けましたが、東日本大震災に関する研修なども予定通り終えることができました。最終日は空路で伊丹空港着の予定でしたが、航空機の機材故障のため代替便で関西空港に到着しました。出迎えの保護者の多くの方々がすでに伊丹に着いておられましたので、関空への移動をお願いしました。また、到着時刻が午後11時30分を過ぎ、自家用車でのお迎えをお願いせざるを得ませんでした。ご心配をお掛けしました。紙面を借りてお詫び申し上げます。なお、今回の修学旅行から取り扱い旅行会社を変更しました。一社に限定せず、3年ごとに見直すことで修学旅行の目的に合致した魅力ある行程作りをするとともに、保護者の皆様のご負担の軽減を考慮したいと考えています。他学年の日帰りの校外学習もこの期間に実施し、学年ごとに淡路島方面や丹波篠山を訪問しました。

校史をひもとくと、バザーは100年程前に始まった最も古い学校行事の一つで、当時は同窓会(千と勢会)が中心となって開催し、入場料も徴収していました。その後、各家庭からの寄付品を持ち寄って販売したり、七輪でカレーやおでんを販売したりして、次第に現在の模擬店を中心とするバザーの形態となりましたが、収益金は学校の設備整備・備品購入のためにその全額が充てられていました。今年のバザーは好天に恵まれ、活気ある素晴らしい一日となりました。各クラスの模

擬店はチャーハンに餃子など飲食店、お化け屋敷やゲーム店など様々で、PTA喫茶や同窓会の売店などもあり、まさに「オール松蔭」のイベントでした。現在のバザーは、収益金の全額を寄付することにしており、奉仕の精神の実践を意識する行事となっています。寄付先については毎年各クラスで話し合い、今年は収益の8割を次の3団体に寄付することを決めました。1つめは、劣悪な環境のもとで飼育されていたり殺処分が決まったりしている犬、猫の保護活動を行う三重県の団体「わんにゃんプロジェクト」です。2つめは、アフリカやアジア、中南米など世界190の国と地域で貧困や戦争、災害に苦しむ子供たちのために食糧、医療、教育などの支援活動を行う「日本ユニセフ協会」。3つめは、医療ケアを必要とする子供と家族を支援する施設を運営する「チャイルドケモハウス」です。残りの2割については、生徒が日頃奉仕活動で訪問している「特別養護老人ホームきしろ荘」「神戸真生乳児院」、そして校内パン販売をお願いしている就労継続事業所「にじ作業所」に寄付します。

高校生のBlue Earth Projectでは10月下旬、「海にいいこと、やさしいこと、はじめよう!」を合言葉として横浜で行われた「東京湾大感謝祭」に高1生22名が参加しました。先月には、高2生19名が「SDGsイベント in 沖縄/美ら海バージョン」に参加し、沖縄本島のショッピングモールやリゾートホテルで啓発活動に取り組みました。3学期には進路が決定している高3生を中心に高1、高2生も加わり、約100名の生徒が取り組む予定です。

中高それぞれのアセンブリー(生徒集会)では、クラブ活動や個人活動の校内外での取り組みについて表彰しました。全国大会レベルの活動としては、アーチェリー部が県新人戦団体に優勝(70mラウンド女子団体)し、高2の波部日葵さんが全国高等学校選抜大会への出場権を得ました。また、高2の光森美絢さんが馬術の部で第74回国民体育大会に出場しました。

全校読書運動と国語科の課題としての読書感想文の取り組みについての表彰も行いました。全校読書運動では、学年ごとに「本の帯つくろう(中1)」や「POP作り(高3)」などのテーマを決めて取り組みました。国語科では全国コンクールの課題図書などの感想文に取り組み、兵庫県私立学校読書感想文コンクールでは次の皆さんが入賞しました。

中学の部	佳作	中1	杉田麻維	「くちぶえ番長」を読んで
	佳作	中2	服部仁美	「ぼくがぼくであること」を読んで
	入選	中3	中島与喜子	しあわせ
高校の部	佳作	高1	福永陽菜	「羊と鋼の森」を読んで
	入選	高2	春名凜子	ライフイズビューティフル
	佳作	高3	今井柚花	「キッチン」を読んで

また、兵庫県下の私学各校の書道部による第52回「私学の書展」が、三宮「さんちかホール」で開催されました。(左写真)本校からは中高部員の作品を出品し、高校2年の川田愛さんが代表として席上揮毫を行いました。

(裏面に続く)



11月の人権講演会では、世界中で活発に議論されるようになったLGBTについて知り、理解する時間をもちました。事前に教職員研修を実施したうえで、性同一性障害の当事者として活動しておられる清水展人（ひろと）さんの講演「男らしく、女らしく、より自分らしく生きる。多様な性を知ろう」を聞きました。多くの生徒にとって初めての機会のように、皆熱心に耳を傾けていました。翌日の特別礼拝では名古屋を中心に全国で活動されているキリスト教牧師、後藤香織司祭のお話も聞きました。多様性を認め、互いに人としてリスペクトできる感性はこれからの時代を生きる若者に必須です。人種、宗教、文化の違いなどの隔ての壁を乗り越えて物事を見る、グローバル思考に通じているように思います。

最後に11月1日の大学入試に関するニュースについて。文部科学省は、現高2生から始まる大学入学共通テスト（新センター）で英語民間検定試験活用の導入を見送ることを発表しました。今後については、現中1が大学受験を迎える2024年度の実施に向けて調整するとのことで、それまでは従来のセンター試験同様、大学入試センターが作成する試験問題で実施されることとなります。本校では英検またはGTEC全校受験を実施するなどして制度変更の準備をすすめるとともに、高2生については次年度の英検予約や全員の共通ID申し込みを予定していました。文科省の中止発表を受けてそれらの申し込みをキャンセルし、翌日、高2の保護者の皆様に学校側としての対応について文書でお知らせしました。新センターでは、国語と数学の一部で記述問題が導入されることになっていますが、民間業者による採点の公平性や運営の問題も指摘されています。学校側としては入試制度の変更が生徒にとってマイナスとならないようしっかりと対応してまいります。必要な情報と学校としての方針はその都度、進路指導部からお知らせいたします。生徒たちには、制度変更に関わることなく基礎基本の学力と記述問題に対応できる力や、英語4技能の実力を着実に身に付けることが大切だと指導したく考えています。

St.Michael's International School(SMIS) 聖ミカエル国際学校との教育提携

神戸市中央区にあるSMIS（聖ミカエル国際学校）の廊下には右の写真が掲げられています。左側の男性は、松蔭中高の第10代校長八代斌助（やしろうひんすけ）先生。右側の女性は中高のレオノラチャペルの名称の由来となったレオノラ・リー先生。松蔭で長年にわたり英語と聖書を担当されました。



1946年、二人の先生の手で外国人学校として発足したSMISでは、現在25ヶ国の小学生約160名が学んでいます。英国の初等教育課程をベースに国際標準と言われる総合教育課程IPC(International Primary Curriculum)にもとづく教育を行っており、国際的にも高い評価を受けています。設立の経緯から松蔭の姉妹校のような存在でしたが、これまで学校間の連携はほとんどありませんでした。しかし2017年度よりSMISの小学生対象の英語イマージョン教室“Saturday School”に、本校の高校生をスクールアシスタントとして派遣するプログラムが始まりました。各学期に高校各学年から5名程度を派遣していますが、「松蔭のお

姉さん」は、親しみやすく子供たちに大人気の存在になっているようです。派遣生となる資格は、「英検2級以上で子供が好きなこと」です。国内ではふつう体験できないインターナショナルスクールの環境に、生徒は戸惑いつつも大きな刺激を受けています。

昨年、派遣された生徒の手記を紹介します。

「私は高1の3学期と高2の2学期にアシスタントをした。初めて学校を訪れた時、周りを行き交う英語を聞き取るのに必死で自分から生徒や先生方に話しかけられなかったことがとても悔しかった。そこで、2年生で再びアシスタントに行くことになり、今度こそ積極的に話そうと決意し、疑問に思うことや興味を持ったことについてすぐに先生に質問してみると、とても丁寧に教えてくださって、会話を続けることが出来た。ミカエルでの経験は私に英語を頑張るモチベーションを与えてくれた貴重ものとなった。」

（写真は昨年のSMISアシスタントの様子です）

2020年度中学1年生から設置される本校のグローバルストリーム(GS)では、毎週土曜日に”Global English Saturday School”が開講します。SMISの教育課程を日本の中学生版にアレンジして松蔭で実施するプログラムです。授業は“Literacy(リテラシー。情報入手や活用、発信)”を中心に構成され、英語イマージョンの課題解決型授業を展開する予定です。また夏休み中のGS生のSummer CampはSMISで実施する予定です。高校生のスクールアシスタントは今後も継続することになっており、両校の連携は今後一層深まります。先日、松蔭女子学院理事長とSMIS校長の間で教育連携協定書に調印し、本格的な提携が正式に決まりました。松蔭の教育の枠組みがまた一つ広がりました。



第2回保護者「おしゃべり会」を開催しました

11月22日の「おしゃべり会」には中1、中2のお母様が参加され、まず、相談室の日永田カウンセラーから、脳の構造についての話を聞きました。人間の脳の構造は、中心部の脳幹が「生きるための脳（爬虫類脳）」、その外側の大脳辺縁系は「感じる脳（哺乳類脳）」、一番外側の大脳新皮質は「思考する脳（人間脳）」と分類でき、プラス思考の口癖や言葉は、安心や喜び、意欲や気分の安定を「感じる脳」にもたらすそうです。例えば、精神的にネガティブになっている時には、「だいじょうぶ」という言葉を自分にも人にも言うことが大切だ、というお話でした。参加された保護者のお一人は、「『だいじょうぶ？』と語尾を上げると真逆の意味になってマイナスですね」とおっしゃり、出席者一同で大いに納得しました。学校のことや子育てについて、お子様の学年と関わりなく保護者どうしで語り合う場所が「おしゃべり会」です。今年度のテーマは「ほっと、ひと息」です。次回は2月中旬から下旬に予定しています。